



TITLE:

京大広報 No. 369

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 369. 京大広報 1989, 369: 675-690

ISSUE DATE:

1989-04-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209309>

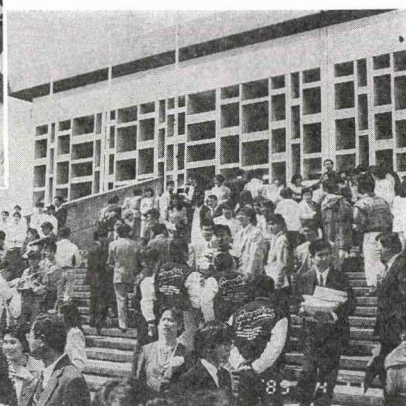
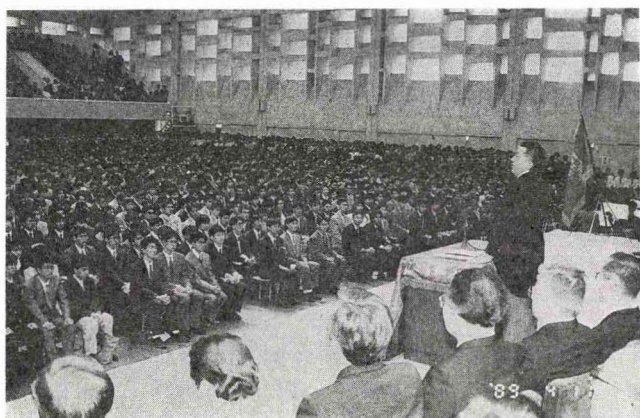
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 369

京都大学広報委員会



平成元年度学部入学式
—関連記事本文682ページ—

目 次

学部入学式における総長のことば 総長 西 島 安 則.....	676	京都大学春秋講義の開催.....	684
名誉教授称号授与式.....	681	昭和63年度京都大学後援会 助成金交付者.....	685
平成元年度学部入学式.....	682	＜部局の動き＞ 超高層電波研究センター研究管理棟完成.....	687
平成元年度大学院入学式.....	682	＜随想＞ 八幡信仰のルーツは中国である 福 永 光 司.....	689
平成元年度医療技術短期大学部 入学式.....	682	日 誌.....	690
部局長の交替等.....	682	訃 報.....	690
名誉博士称号贈呈式.....	682		

学部入学式における総長のことば

平成元年4月11日

総 長 西 島 安 則

諸君、入学おめでとう。

本日、ここに、元総長 奥田 東先生（第17代総長）、前田敏男先生（第18代総長）、そして、渡邊庸一郎先生（昭和36年名誉教授）はじめ多数の名誉教授の先生方の御来臨を賜り、各部局長、教職員の皆さまと共に、平成元年度学部入学式を挙行し、2,864名の第一学年入学者、25名の第三学年編入学者の諸君を迎えますことは、京都大学の最も大きな喜びであります。

諸君は、京都大学で学ぶことを志し、努力を重ねて、入学試験に合格し、晴れて本学に入学しました。皆さんの輝く目に、京都大学の学生としてのこれからの日々に対する潑刺とした意欲を感じます。本学の学風の新しい担い手としての頼もしい諸君を全学あげて心から歓迎します。

今日のこの日を迎え、これまでの年月、諸君の勉学を支えて下さった御家族の方々、いつも励まし導いて下さった先生方、共に楽しく日々を送り力づけ合ってきた諸君の友人たち、そのほか、かげにひなたに諸君を見守って下さった周りの多くの方々に、ここで、諸君と共に、改めて御礼を申し上げます。

京都の吉田のこの地に第三高等中学校が開校して、今年はちょうど100年になります。明治22年（1889）の9月11日にその開校式が挙行されました。そして、ここに、世界の最高学府の礎が最初に築かれたのです。その第三高等中学校は明治27年（1894）6月に第三高等学校となりました。そして、京都大学は明治30年（1897）6月に真の学問の府を目指して、この地に創立されました。

今日は、その京都大学の創立前後の時代を生きられた物理学者、村岡範爲^{はんい ち}馳（1853～1929）先生のことを通して、本学の生まれた頃をしのび、そして、「学ぶ」ということの意義を諸君と共に考えたいと思います。

村岡範爲馳は、ペリー（Matthew Calbraith Perry, 1794～1858）が黒船艦隊を率いて浦賀沖に来航し、日本の開国を迫った年、嘉永6年（1853）6月10日に鳥取で生まれました。それは黒船来航のひと月前でした。幼名は半之丞と呼ばれました。明治11年（1878）に、村岡範爲馳は「師範学科取調ノ為メドイツ国へ差遣候事」との辞令を受け、ドイツのシュトラースブルク（Strassburg）大学へ留学しました。¹⁾

このシュトラースブルクは、ライン川の流域にあり、その名の示すように「道路の町」として古

くローマ時代よりヨーロッパの交通の要として盛え、中世には自由都市として繁栄しました。大学は16世紀の中頃、1567年に創設されました。町は17世紀の末にフランス領となりました。1870年のフランスとプロシアの戦いの後、第一次世界大戦（1914～1918）の終末までは、ドイツ帝国領で、その後、再びフランス領となりました。中世風の本造建築が美しい街です。このような波乱の歴史を越えて、ここの大学は、ヨーロッパの学術の一つの重要な中心として、現在に至っています。

村岡はシュトラースブルク大学のクント（August Adolph Eduard Kundt, 1839～1894）教授の研究室に入りました。クント教授は、現在、物性物理学と呼ばれる学問分野の先駆的研究者で、すでに、種々の固体や気体中を伝わる音波の速度（1866年）や、光の屈折率の波長による変化と、その異常な分散と光吸収との関係（1871年）などについて、顕著な研究成果を挙げていた気鋭の物理学者でした。そのクント教授の研究室には、レントゲン（Wilhelm Conrad Röntgen, 1845～1923）助教授がいました。彼はクント教授がチューリッヒ（Zürich）大学の物理学の教授のとき（1869年）から、同教授の助手をつとめ、クント教授と共に、ヴュルツブルク（Würzburg）大学を経て、シュトラースブルク大学に来て、助教授となりました。時に、クント教授は39歳、レントゲン助教授は33歳、そして、村岡範爲馳は25歳でした。実に素晴らしい出会いでありました。



村岡範爲馳 博士

村岡は、このクント教授の研究室で、炭素の電気伝導率の温度による変化という基礎的な素晴らしい研究をし、学位論文をまとめ、博士の学位を取得しました。明治14年（1881）、27歳のときです。彼の仕事は、“Ueber das galvanische Verhalten der Kohle von Hanichi Muraoka aus Japan” という見出しの13ページにわたる論文が、その頃この分野で最も権威ある学術誌 *Annalen der Physik und Chemie* に掲載されています。これは、国際的な学術誌に発表された日本人による物理学の最初の論文であろうとされています。²⁾

帰国後、村岡は明治15年（1882）東京大学医学部にて物理学の教授となり、そして、第一高等中学校の教官などを経て、明治24年（1891）に東京音楽学校の第2代校長に就任しました。そして、明治26年（1893）第三高等中学校の教官になりました。この間、彼は音響学の研究、グラファイトなど炭素の物性の研究、そして日本魔鏡の研究など、極めて多彩な研究を続けました。

この入学式式場の体育館の真向かいの京都大学文学部博物館では、今日から、椿井大塚山古墳から出土した青銅の鏡など、邪馬台国の歴史の謎を秘めた鏡が沢山展示されています。そして、来月からは、日本の古代国家の成立過程についての公開講座も開かれます。

日本魔鏡と呼ばれたものは、日本の青銅の鏡で、裏面にはいろいろの紋様があり、表面は磨いて鏡になっているものです。この鏡の面に顔を映すと、普通の鏡のように顔が映り、特に変わったこ

とはありません。しかし、この鏡の表面に日光を反射させて、その反射光を白壁に投影させると、鏡の裏面の紋様の像が壁に映るというもので、当時ヨーロッパで日本の魔鏡と呼ばれ、多くの物理学者が興味を持って研究したものです。村岡がなぜこの魔鏡に興味を持ったのかは特に述べられていませんが、当時の *Annalen der Physik und Chemie*, *Annalen der Physik* などのドイツの学術誌や、我が国の学術誌『東洋学芸雑誌』あるいは『学芸志林』などの村岡の学術論文を見てみますと、彼が最初に鏡に興味を持って研究したのは、音響学に深い関係があります。彼は、その頃音色写真という新しい研究方法を発見し開発しました。^{3,4)}

彼の見出し名付けたこの音色写真とは音色を画に写すと書きますが、青銅の鏡の縁に、例えば、胡弓の弦をあてて音を出しながら、鏡に当たる日光の反射を白い壁に映すと、音色に応じた紋様がその映像の中に写し出されるというものです。たぶん、このような研究を進めるうちに、日本魔鏡の研究にも入って行ったと思います。彼はこの日本魔鏡についての論文をドイツの学術雑誌に発表しております。村岡はこの日本魔鏡の研究で、明治24年（1891）に我が国の理学博士の論文博士第一号の学位を授与されました。^{5,6)}

明治27年（1894）第三高等中学校が第三高等学校と改称され、村岡は物理学教授としてまた教頭を勤めました。その頃、村岡の古い友人であるレントゲンは、ヴュルツブルク大学の物理学教授として陰極管による研究を始めていました。レントゲンがX線を発見し、それについての第一報の原稿を書き上げたのは1895年（明治28年）12月28日でした。そして、翌1896年（明治29年）1月4日には、物理学会50回記念大会がベルリン大学物理学教室で開催され、そこではじめてレントゲンの最初のX線写真が公開されました。このX線の発見は、直ちに世界に伝わり極めて大きな反響を呼びました。^{7,8)}

その年の夏のはじめには、レントゲンのX線についての最初の論文が日本に到着しております。村岡は友人レントゲンにこの素晴らしい発見に対して、早速お祝いの手紙を送りました。彼の手紙は今も、レントゲンの生地であるドイツのレネッ（Lennepe）にあるレントゲン博物館に大事に保存されているということです。¹⁾

村岡は、レントゲンの発見したこのX線の本性に大変強い興味を持ちました。早速、レントゲンレントゲンの実験の追試のために、実験に着手しました。彼は当時第三高等学校の物理教室の助手であった糟谷宗資（1869～1926）と共にその実験にかかりました。実験設備も不十分でしたが、島津製作所の実験室で二代目島津源蔵（1869～1951）とその弟の島津源吉、それに島津製作所の工員の藤木栄太郎が共同して実験にあたりました。時に、村岡43歳、糟谷27歳、島津源蔵27歳、源吉19歳、藤木21歳でした。

島津製作所の実験室で、日夜、X線の発生装置を作っていた村岡らのグループは、源造の作ったウィムズハースト型（Wimshurst）起電機を直流500ボルト1馬力のモーターで回転し、高圧電源を得て、ついにその年の秋、明治29年（1896）10月10日の夜明けに、我が国で最初にX線の発生とX線写真の撮影に成功しました。^{9,10,11)}

村岡は実験を進めると同時に、物理学者としてX線の本性について考察を進めています。当時、

京都市内の市立龍池尋常小学校の講堂で、「レントゲン氏のX放射線の話」と題する公開講演を行っております。彼はこの講演をまとめ、『波動論一般、陰極放射線、X放射線』として、明治29年（1896）の8月に出版していますが、これは我が国での放射線に関する最初の科学書と言うことができます。

翌明治30年（1897）6月に、京都帝国大学が創立され、まず理工科大学が設置されました。村岡範爲は京都帝国大学の物理学科の教授に就任し、物理学第二講座を担当し、音響学を創始し、またX線の本性についての研究を進めました。大正2年（1913）、60歳で退官し、名誉教授となりました。この物理学第二講座は、次に玉城嘉十郎教授が昭和13年（1938）まで担任し、その後を湯川秀樹教授が担任して、理論物理学の研究の中心として幅広い本学の物理学の学風を築き上げ、やがて日本の物理学は世界の物理学の中で大きな役割を果たすようになったのです。^{12,13,14}

「学ぶ」ということ、これは「知る」ことの楽しみから始まり、そして、知ったことを結びつけながら次第にその中で自分自身の「理解」を進めます。こうして、自分の「考え」を形づくり、またそれを「確かめ」て、さらに広く深い「理解」へと進んで行くのです。その中に研究者の個性的な独創が成熟します。

個性的独創と言いますが、それは決して突然生まれるものでなく、知ったことの結びつきを作りつつ自分としての理解を深める一步一步の中にこそあります。学問の成熟には長い歴史の蓄積がありますが、それは、その歴史の流れの中の一人一人の理解の成熟のつながりによってつくられたものです。

私のことになりますが、私が本学に入学して2年経ち、いよいよ卒業研究を始めることになり、指導教授の堀尾正雄先生（現名誉教授）から「高分子が巨大な分子であることを確かめるために何でもよいから、思う存分やれ」という御指示をいただきました。もう40年も前のことです。血氣盛んとも言いますか、それまでに習い、調べた事を超えて、自分で何か新しい研究方法を見出して画期的な実験をしたいとひそかに考えていました。その頃はまだ、高分子の特性については、確かめられた事実と、想像され仮想された像とが、混沌と入り混じっていました。

その当時、堀尾先生の先生であった喜多源逸名誉教授は時々私の研究室へお立ち寄り下さいましたが、喜多先生が孫弟子である私に、ある日、ふと、ぼつりと、「まなび」は「まねび」だ。まずまねることから始めるのだ」と言われました。喜多先生のなされた多くの素晴らしい研究を知っており尊敬していた先生から、この言葉を聞きましたとき、実のところ私は、心の中のどこかである種の失望と反発に似たものを感じたのです。喜多先生はそんな私の心の中を見てとられたのか、じっと私の顔を見ておられました。温かい眼差しで、しかし、それ以上何も言われませんでした。先生はその時、学ぶことの厳しさを論して下さったのでした。

恥ずかしいことですが、先生のおっしゃった意味が次第にわかってきたのは少し時が経ってからでした。しかし、その時の情景は今も脳裏に焼き付いています。最新の最先端の論文ばかりを読み、それが表層的にわかったとしても、真の独創的な仕事はそこからは生まれてはきません。こうして私は学問の深さをしっかり味わうことを教えていただきました。そして学問の歴史の大きな流

れの中で、一人一人の研究者が何をどう考え、悩み、どのように未知の世界へ歩みを進めたかを自分なりに理解しようとするようになりました。そして、次第に「学ぶ」と言う事の意味がわかってきました。

本学に入学し、諸君はいよいよこれから真に学び、そして自分を磨いていくのです。学問の大きな歴史も、その中にその時代時代に生きた一人一人の中の学の成熟によってつくられてきたのです。諸君、真に学び、その中で個性を磨き、本当に知ることの楽しさというものを味わえるような素晴らしい学生生活を送ってくれることを期待しております。入学おめでとう。皆共にしっかり学びましょう。

参考文献等；

- 1) 村岡重浪,「祖父 村岡範爲馳のこと」, 日本物理学会誌, 32巻, 10号, 868~871 (1977)。
- 2) “Ueber das galvanische Verhalten der Kohle”, Annalen der Physik und Chemie, XIII, 307~318 (1881).
 なお、この論文は、「学芸志林」13巻, 187~210及び267~304, 東京大学編纂, 明治16年 (1883), に紹介されている。
- 3) 村岡範爲馳,「音色写画及ヒ音色塵画」, 東洋学芸雑誌, 14号, 341~343, 明治15年 (1882)。
- 4) 村岡範爲馳,「音色写画ノ略解」, 東洋学芸雑誌, 16号, 433~435, 明治16年 (1883)。
- 5) Hanichi Muraoka, “Herstellung der japanischen magischen Spiegel und Erklärung der magischen Erscheinungen derselben”, Annalen der Physik und Chemie, XXII, 246~252 (1884)。
- 6) Hanichi Muraoka, “Ueber den japanischen magischen Spiegel”, Annalen der Physik und Chemie, XXV, 138~140 (1885)。
- 7) W. C. Röntgen, “Ueber eine neue Art von Strahlen”, Sitzungsberichte der Würzburger Physik-med. Gesellschaft, 132~141 (1895)。
- 8) J. J. Thomson, “The Röntgen Rays”, Nature, LIII, 391~392, 581~583 (1896), をはじめ, Nature の Vol. 53 (Nov. 1895~Apr. 1896) にはレントゲンのX線発見直後からの学界への大きな反響を示す多数の論文が掲載されている。
- 9) 今市正義, 原 三正, “本邦におけるX線の初期実験”, 科学史研究, 16号, 23~32 (1950)。
- 10) 神陵史編集委員会編,「神陵史—第三高等学校八十年史」, 374~375, 三高同窓会発行 (1980)。
- 11) 日本物理学会編,「日本の物理学史」上, 209~214, 東海大学出版会 (1978)。
- 12) “Memoirs of the College of Science and Engineering, Kyoto Imperial University”, Vol. I (1903~1908), Vol. II (1909~1910)。
- 13)「京都帝国大学史」, 821~824, 京都帝国大学 (1943)。
- 14)「京都大学七十年史」, 456~466, 京都大学 (1977)。

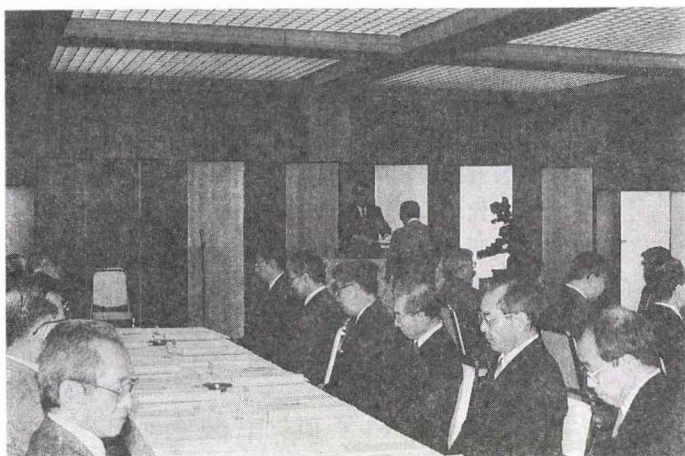


<大学の動き>

名誉教授称号授与式

4月6日(水)午前10時30分から、名誉教授称号授与式が、京大会館において挙行された。授与式は、部局長の臨席のもとに行われ、称号授与のあと、「総長あいさつ」があって、午前11時30分に終了した。称号を授与された方は次の56名である。

(敬称略)



(氏 名)	(推薦部局名)
合 田 健	(工 学 部)
千 葉 英 雄	(農 学 部)
出 口 安 夫	(教 養 部)
上 山 安 敏	(法 学 部)
橋 本 勲	(経 済 学 部)
林 巳奈夫	(人文科学研究所)
山 本 剛 夫	(工 学 部)
坂 本 慶 一	(農 学 部)
酒 井 修	(文 学 部)
中 村 賢二郎	(人文科学研究所)
藤 澤 令 夫	(文 学 部)
平 井 俊 彦	(経 済 学 部)
徳 岡 善 助	(教 養 部)
小 島 次 雄	(工 学 部)
矢 島 治 明	(薬 学 部)
花 岡 正 男	(ウイルス研究所)
吉 田 善 一	(工 学 部)
楠 幸 男	(理 学 部)
滝 澤 精 二	(教 養 部)
田 中 春 高	(ウイルス研究所)
森 田 雄 平	(食糧科学研究所)
田 中 久	(薬 学 部)
小 山 隆 三	(教 養 部)
東久保 勝 彦	(ク)
河 合 良一郎	(ク)
久 保 熙	(ク)
古 川 修	(工 学 部)
小 野 一一郎	(経 済 学 部)

(氏 名)	(推薦部局名)
島 田 信 夫	(数理解析研究所)
片 岡 昇	(法 学 部)
恩 地 勝	(理 学 部)
小 関 治 男	(ク)
伊 原 千 秋	(工 学 部)
谷 川 道 雄	(文 学 部)
清 水 茂	(ク)
松 浦 輝 男	(工 学 部)
亀 井 節 夫	(理 学 部)
長谷川 博 一	(ク)
上 田 閑 照	(文 学 部)
田 中 吉之助	(工 学 部)
田 中 孝	(農 学 部)
都 留 春 雄	(教 養 部)
池 上 文 夫	(工 学 部)
町 田 茂	(理 学 部)
尾 崎 雄二郎	(人文科学研究所)
植 野 修 司	(教 養 部)
筒 井 天 尊	(原子炉実験所)
一 松 信	(数理解析研究所)
廣 海 啓太郎	(農 学 部)
堤 利 夫	(ク)
岡 信三郎	(化学研究所)
翠 川 修	(医 学 部)
内 野 治 人	(ク)
獅 山 慈 孝	(農 学 部)
室 伏 靖 子	(霊長類研究所)
林 功 三	(教 養 部)

平成元年度学部入学式

4月11日(火)午前10時10分から、平成元年度学部入学式が名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は学歌斉唱(京都大学音楽部交響楽団及び京都大学合唱団が協力)に続いて、「総長のことば」(前掲)があり、午前10時40分終了した。

今年度の新入生数は、外国人留学生13名を含め、次のとおりである。

文学部225名、教育学部68名、法学部416名、経済学部254名、理学部307名、医学部124名、薬学部94名、工学部1,036名、農学部340名、計2,864名。そのほか、第3年次に25名の編入者があった。

平成元年度大学院入学式

4月11日(火)午後3時から、平成元年度大学院入学式が名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに、本学総合体育館で挙行された。

入学式は学歌斉唱(京都大学音楽部交響楽団及び京都大学合唱団が協力)に続いて、「総長のことば」(次号掲載予定)があり、午後3時25分終了した。

なお、今年度の大学院入学及び進学状況は次のとおりである。

研 究 科	修士課程	博 士 後 期 課 程	
		入 学	進 学
文学研究科	66 名	13 名	64 名
教育学研究科	16	0	14
法学研究科	21	1	14
経済学研究科	20	6	20
理学研究科	189	8	105
医学研究科		131*	
薬学研究科	38	0	15
工学研究科	594	16	65
農学研究科	155	16	51
計	1,099	191	348

注 *は博士課程

平成元年度医療技術短期大学部入学式

医療技術短期大学部では、平成元年度入学式を4月7日(金)午前10時から、本短期大学部講堂において来賓臨席のもとに挙行した。式典は学長式辞、来賓祝辞があつて、午前10時45分終了した。

今年度の新入生数は、看護学科80名、衛生技術学科40名、理学療法学科22名、作業療法学科20名及び専攻科助産学特別専攻20名の計182名である。

(医療技術短期大学部)

部 局 長 の 交 替 等

原子炉実験所長

岡本 ^{すなお} 朴原子炉実験所長の任期満了に伴い、その後任として西原英晃 ^{ひであき} 原子炉実験所教授(原子炉熱特性管理研究部門)が4月2日任命された。任期は平成3年4月1日までである。

名誉博士号称号贈呈式

3月27日(月)午前10時から、総長室において各研究科長及び関係者出席のもとに名誉博士号称号贈呈式が挙行され、ソビエト科学アカデミー会員、ソビエト社会主義共和国連邦国立モスクワ大学教授イズライル・モイセーヴィチ・ゲルファンツ氏に名誉理学博士の称号が贈呈された。

同氏は引き続き、附属図書館AVホールにおいて「Development of Representation Theory and Combinatorics」と題して記念講演を行った。

なお本学における名誉博士号の授与はゲルファンツ氏が最初である。

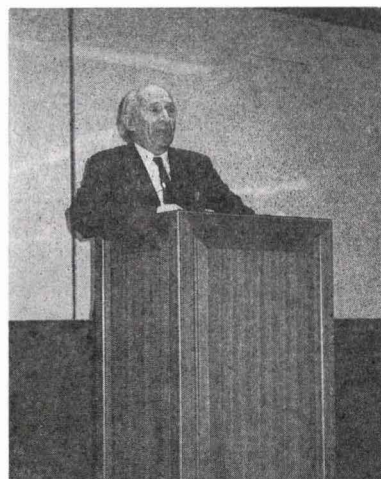
以下に授与の趣意及び同氏の略歴を紹介する。

(趣意)

ソビエト科学アカデミー会員、ソビエト社会主義共和国連邦国立モスクワ大学教授 ^{イズライル} Izrail



名誉博士号称号贈呈式—総長室—

記念講演をするゲルファント博士
—附属図書館AVホール—

モイセーヴィチ ゲルファント
Moiseevich Gelfand 氏は、半世紀以上にわたって、数学の広範な領域において目覚ましい研究活動を続け、数多くの顕著な業績を挙げて来た。同氏の卓越した洞察と創造的な研究は、常に世界の数学界を嚮導し、特に函数解析学の領域において新しい諸分野を創造し、また解析学における多くの現代的問題に新しい観点を導入して明確な方向付けを与えた。云うまでもなく、現代科学の研究において数学の役割は重要である。同氏の深遠な研究成果が、全世界の数学者及び数理科学者に強い影響を与え、今世紀後半における数学の進歩に偉大な貢献をしたことは、つとに広く讃えられているところである。

わが国の数学及び理論物理学の研究者に対して、同氏は大きな影響を与えて来たが、特に本学における数学の研究に対して与えた影響は極めて大きく、また根本的である。

本学理学部における函数解析学の研究は、同氏の研究を源流とし、それを継承・発展させて来た部分が大い。1966年理学部に函数解析学講座が新設されたとき、同氏の研究を基礎として設定さ

れた研究領域がその内容となった。これによって本学では表現論とその関連分野についての多くの研究が発展し多数の研究者が育成された。

また、わが国における数理科学振興の中心として構想された本学数理解析研究所においては、同氏がかねて強調して来た、数学と理論物理学等諸科学との交流を研究の基本理念としている。同氏が開拓した解析学の代表的方法は、この研究所の研究者によって今日代数解析学とよばれる分野に発展し理論物理学の諸問題にも応用されて大きな成果をあげている。

(略歴)

Izrail Moiseevich Gelfand

1913年 9月2日生

1935年 ソビエト社会主義共和国連邦国立
モスクワ大学助教授

1943年 同教授

1968～70年 モスクワ数学会会長

(京大広報 No.316 参照)

京 都 大 学 春 秋 講 義 の 開 催

本学では、財団法人京都大学後援会の協力のもとに、一般市民を対象とする「京都大学春秋講義」(平成元年度春季)を下記のとおり開講する。

本学教職員並びに学生については、別途受講枠を設けているので受講希望者は、所属部局の事務担当者に申し込まれたい。

記

☆月曜講義(5回連続)

メインテーマ:『先端工学技術の現在』

企画・構成:工学部教授 川 端 昭

開 講 日	講 師	サ ブ テ ー マ
5月15日	工学部教授 川 端 昭	現代工学技術の潮流
5月29日	化学研究所 教 授 作 花 濟 夫	新素材の展開
6月12日	工学部教授 堂 下 修 司	情報処理・人工知能
6月26日	工学部教授 砂 本 順 三	生体材料工学
7月10日	工学部教授 川 端 昭	工学技術の課題

定 員 100名

受 講 料 6,000円

会 場 京都大学時計台1階法経第二教室

時 間 午後6時30分～午後8時30分

申込締切日 4月26日(水)まで

☆水曜講義

開 講 日	講 師	テ ー マ
5月10日	名 誉 教 授 上 山 安 敏	「世紀末」と精神分析の誕生
5月24日	理学部教授 加 藤 幹 太	現代生物学の特徴
6月7日	経済研究所 助 教 授 浅 田 彰	本物の贋金の話
6月21日	農学部教授 久 馬 一 剛	土壌・食料・環境
7月5日	教育学部教授 河 合 隼 雄	臨床教育学の視点

定 員 120名

受 講 料 1 講義分 1,500円 (1回のみの受講から5回連続の受講)
5 講義分 6,000円 (まで、いずれの受講も可能です。)

会 場 京都大学時計台1階法経第二教室

時 間 午後6時30分～午後8時30分

申込締切日 それぞれ開講日の10日前まで

○申込方法

官製はがきに、①月曜講義・水曜講義の別（水曜講義の場合は、受講希望日）、②住所、③氏名、④電話番号を明記のうえ、下記の申込先へ申し込むこと。ただし、定員に達し次第締め切る。

なお、受講料は、受講決定通知後に支払うこと。支払後の返金は認めない。

○受講資格は問わない。

○申込先 庶務部庶務課学務掛（内線2041, 2043）

昭和63年度京都大学後援会助成金交付者

京都大学創立七十周年記念後援会助成金選考委員会で決定した昭和63年度助成金交付者は、第1種（海外派遣研究員）26名、第2種（海外からの招へい学者）15名、第4種（旧第6種）7名で、それぞれ次のとおりであった。

1. 第1種

本学教官が、専攻する学問分野等について調査、研究のため海外に派遣される場合に助成金（往復航空賃及び日当、宿泊料）を交付するもので、派遣区分は、6か月、3か月、1か月、若手研究者（概ね1年）である。

派遣区分	所属部局	職名	氏名	派遣国	研究題目
6か月	医学部附属病院	助手	稲本 俊	アメリカ合衆国	肝臓の増殖・再生の制御機構の研究
	農学部	教授	並河 清	アメリカ合衆国, カナダ, 連合王国, フランス, ドイツ連邦共和国, スイス	農用作業機械の高度自動化に関する研究
	アフリカ地域研究センター	助教授	小山 直樹	連合王国, ブルンジ, フランス, ケニア, ザイール, マダガスカル	熱帯アフリカにおける動植物相の調査研究
3か月	文学部	教授	吉岡 健二郎	ドイツ連邦共和国, イタリア, スイス, フランス	K. フィードラー関係資料調査
	経済学部	教授	山田 浩之	フィンランド, オーストリア, ドイツ連邦共和国, オランダ, 連合王国, カナダ, フランス, アメリカ合衆国	欧米諸国の都市化と都市・交通問題
	木材研究所	助手	川井 秀一	カナダ, アメリカ合衆国, 連合王国, フランス, スイス, ドイツ連邦共和国, スウェーデン, フィンランド	木質及び木質系複合材料の開発に関する研究調査
	医療技術短期大学部	教授	上羽 康夫	スウェーデン, デンマーク, ドイツ連邦共和国, 連合王国, アメリカ合衆国	作業療法及び上肢リハビリテーション医学に関する研究
1か月	教育学部	教授	田中 昌人	オーストラリア	オーストラリア原住民乳幼児の言語及び自我の発達と教育方法の開発に関する研究
	法学部	教授	上山 安敏	スイス, イタリア, ドイツ連邦共和国, オーストリア	バハオーフェンの母権制の研究
	理学部	助手	野村 隆昭	フランス	ジョルダン代数及びジョルダン3種系と調和解析学の研究
	理学部	講師	中村 卓史	オーストリア	一般相対論に関する研究調査
	医学部	助教授	塩田 浩平	ドイツ連邦共和国	アルキル化剤の催奇形メカニズムに関する実験的研究

派遣区分	所属部局	職名	氏名	派遣国	研究題目
1 か月	医学部	助教授	吉田 治 義	アメリカ合衆国	腎臓病に関する日米合同セミナー出席及び腎炎についての研究調査
	薬学部	助教授	橋 田 充	アメリカ合衆国, スイス	第4回日米生物薬剤学シンポジウム, 第15回生物有効成分の放出制御に関する国際シンポジウム出席並びに生物薬剤学研究調査
	工学部	教授	川 崎 清	カナダ, アメリカ合衆国, 連合王国, フィンランド, ドイツ連邦共和国, イタリア, スイス	欧米諸国の大学施設及び学園都市の計画と設計に関する研究調査
	工学部	助教授	上 原 悌次郎	ベルギー, スイス, ドイツ連邦共和国, 連合王国, アメリカ合衆国, フランス	外的ストレスに対する酵母細胞の応答とその生科学的機構に関する研究調査
	農学部	助教授	田 中 克	連合王国	異体類変態の生理・生態学に関する研究
	教養部	教授	伊 藤 稔	アメリカ合衆国	心臓疾患者のリハビリテーションのための運動療法
	教養部	助教授	櫻 井 正一郎	連合王国	イギリスルネッサンス期エビダムの研究
	胸部疾患研究所	助教授	和 田 洋 巳	カナダ, ドイツ連邦共和国	肺移植の臨床応用研究
	ウイルス研究所	助手	伊 藤 維 昭	アメリカ合衆国	細菌表層に関するゴードン研究会議出席及び SecY蛋白質の機能に関する研究調査
	数理解析研究所	助教授	三 輪 哲 二	アメリカ合衆国	数理解析の2次元可解模型の研究
	ヘリオトロン核融合研究センター	助教授	佐 野 史 道	連合王国	中性粒子ビーム入射 (NBI) 装置の技術開発
若手研究者	薬学部	助手	荒 野 泰	アメリカ合衆国	脳, 心筋診断 99m-テクネチウム放射性医薬品の研究
	防災研究所	助手	大 年 邦 雄	アメリカ合衆国	潮流による物質拡散に関する研究調査
	保健管理センター	講師	菅 野 信 夫	スイス	青年期に関する分析心理学的研究

2. 第2種

海外から学者を本学に招へいし、講義、研究指導等を依頼してその分野の研究発展を図るとともに、本学との共同研究の基盤を固めるため、助成金（往復航空賃及び滞在費）を交付するもので、招へい期間は原則として1～3か月（一般）及び1年以内（若手研究者）である。

区分	受入部局	招へい学者名	国名・所属機関及び職名	研究題目
一 般	文学部	Michel Soymie	フランス・フランス高等研究院教授	中国文献学 特に敦煌学
	文学部	Pierre Pachet	フランス・パリ第7大学助教授	フランス文学 ボードレール政治と文学
	経済学部	James O'Connor	アメリカ合衆国・カリフォルニア大学サンタクルーズ校教授	財政学, 国家論 “財政危機と国家論” “世界危機とアメリカ及び日本経済”
	理学部	David L.G. Noakes	カナダ・ゲルフ大学教授	魚類生態学 サケ科を中心とする魚類の生態・行動・遺伝学
	医学部	Tieerd de Graaf	オランダ・グローニンゲン・ファンデルリークス大学教授	音声科学 代用音声の研究
	工学部	Gerard Gouesbet	フランス・ルアン国立応用科学研究所教授	エネルギーシステム及びプロセス工学熱流体システムにおける流動と粒子の光学的診断
	工学部	Svatopluk Poljak	チェコスロバキア・チャールズ大学教授	離散数学 行列及びハイパーグラフの強ユニモジュラ性に関する研究
	工学部	Robert G. Parr	アメリカ合衆国・ノースカロライナ大学教授	量子化学 密度行列法を用いた量子化学の新展開に関する研究
	教養部	L.G. Black	連合王国・オックスフォード大学講師	英文学 ルネッサンス英文学一般
	基礎物理学研究所	Janusz Wilczynski	ポーランド・スウィエルク原子核研究所教授	原子核物理 重イオン核反応に関する研究

区 分	受 入 部 局	招へい学者名	国名・所属機関及び職名	研 究 題 目
一 般	経 済 研 究 所	Carolyn Pitchik	カナダ・トロント大学助教授	経済学(数理経済学) 経済理論, 産業組織論並びにゲーム論
	数理解析研究所	Christian Fronsda	アメリカ合衆国・カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授	数理解析 共形不変な場の量子論の研究
若 手 研究者	経 済 学 部	許 粹 烈	大韓民国・忠南大学校副教授	朝鮮近代史 両大戦間期(1920~30年代) 日本・朝鮮の労働問題
	理 学 部	刘 宏 志	中華人民共和国・復旦大学助手	生物物理学 生態膜の動的構造と機能
	人文科学研究所	廖 育 群	中華人民共和国・中国科学院助理研究員	中国医学史 日本における中国医学及び中国医学史研究の歴史と現状

3. 第4種(旧第6種)

総長及び総長が大学行政上特に必要と認めたものの外国出張に対し、助成金を交付するものである。

所 属・職 名	氏 名	期 間	派 遣 目 的
庶務部庶務課 庶務課長	笹井 宏 益	昭和 63. 9. 14~63. 9. 27	総長に随行してイタリア国等の高等教育・研究機関を訪問し、各機関の管理・運営体制、学術研究の動向、及び高等教育制度の状況等について視察・調査する。
総 長	西 島 安 則	63. 10. 30~63. 11. 6	ドイツ連邦共和国の高等教育・研究機関における学術・教育の国際交流の実情を視察・調査し、本学との学術交流について協議すると共に、ケルン大学創立600周年記念式典に参列し、各国の大学長等と意見交換を行う。
庶務部庶務課 課長補佐	磯 田 潔	63. 10. 30~63. 11. 6	総長に随行してドイツ連邦共和国の諸大学を訪問し、各機関の管理・運営体制、高等教育制度、及び学術国際交流の状況等について視察・調査する。
国際交流委員会 委員長 農学部教授	川 島 良 治	63. 10. 31~63. 11. 9	本学における国際交流を一層活発化すると共に、その体制の整備・充実をはかるため、米国高等教育・研究機関における国際交流活動を視察し、実情を調査する。
庶務部 国際交流課 国際交流課長	及 川 三千男	63. 10. 31~63. 11. 9	国際交流委員会委員長に随行して、アメリカ合衆国の諸大学を訪問し、研究者・留学生受入れ組織の実情、学術・教育の国際交流状況等について視察・調査する。
経理部主計課 主計課長	小 林 武 壽	63. 11. 10~63. 11. 21	タイ国、マレーシア、インドネシア国を訪問し、各国の学術研究機関の財政制度及び施設等の実情について調査し、併せて本学東南アジア研究センター現地連絡事務所の管理・運営状況を視察する。
理学部長	長谷川 博 一	63. 12. 2~63. 12. 19	東南アジア諸国及びオーストラリア国における自然系基礎科学研究体制及び施設の実情を調査する。

<部局の動き>

超高層電波研究センター研究管理棟完成

超高層電波研究センターは工学部附属電離層研究施設を改組して昭和56年4月に創設された全国共同利用センターであり、宇治地区に本拠を置く他、大型設備として信楽MU観測所にMUレーダーを有している。研究部門は超高層物理学部門、超高層電波工学部門、レーダー大気物理学部門、レーダー大気環境科学部門(外国人客員部門)と信楽MU観測所にあるレーダー情報処理室から構成されている。本センターの設置目的は、超高層及び中層大気に関する電波観測及びこれに関連する研究を行うと共に、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供することである。

本センターの研究内容を簡単に紹介する。MUレーダー及び流星レーダー観測によって平均風、長周期波動、大気潮汐波、重力波等の中層・超高層大気中の波動現象の研究が行われていると共に、アジア地域で唯一の「IS レーダー」としてのMUレーダー観測に基づいて電離圏大気の研究が行われている。赤道域の大気は海洋や超高層大気との相互作用が顕著であり全球大気の理解に深く関与するが、地域的制約から観測が不十分である。これを解消するために近い将来インドネシアに赤道レーダーを設置することが計画されているが、現在、アンテナ・アレイの設計、建設適地の選定及びシステム構成の研究が行われている。宇宙プラズマ物理に関しては、大規模計画機シミュレーションの手法を用いてホイッスラー・モード波動・粒子相互作用や宇宙空間プラズマ中へのエ

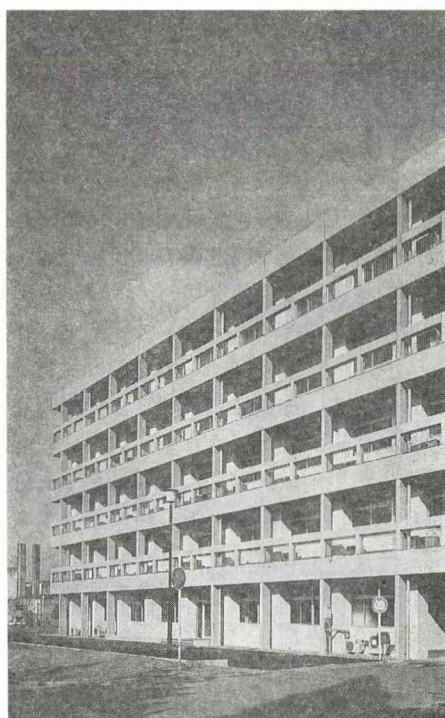
エネルギー注入の計算機実験が行われていると共に、1992年打ち上げ予定の地球磁気圏尾部探査衛星 GEOTAIL に搭載するプラズマ波総合観測装置の設計・開発が行われている。また宇宙太陽発電衛星 (SPS) で必要となるマイクロ波エネルギー伝送の実験を計画し、現在、マイクロ波アンテナ・アレイ、送信モジュール等の開発を進めている。

さて、昨年3月17日に着工した超高層電波研究センター研究管理棟（鉄筋コンクリート造5階建延2,033.40㎡）の新営工事が完了し、3月27日（月）に竣工式及び祝賀会が本センター協議員、運営委員をはじめ関係各位約80名の出席を得て挙行された。

竣工式は新営建物の会議室において午前11時から始まり、加藤進超高層電波研究センター長の挨拶及び大矢誠施設部長の工事経過報告の後、沢田敏男日本学術振興会会長から祝辞が述べられた。

引き続き、祝賀会が催され、前田憲一本学名誉教授の祝辞、喜連川隆前電子情報通信学会副会長の発声で乾杯し、なごやかな雰囲気の中に午後1時閉会した。

本研究管理棟は宇治地区研究所本館南棟を西側に延長する形で建設された5階建の建物であり、



完成した超高層電波研究センター研究管理棟



超高層電波研究センターは1階から4階までの部分を使用している。管理部門である事務室及び会議室、図書室等は1階にあり、センター長室及び計算機室は2階にある。研究室及び実験室は3、4階部分に配置している。本建物の玄関ロビーの壁面には、幅4m、高さ1.8mの陶板に鮮やかに写し込まれた尾形光琳作の紅白梅図が美しく飾られている。

本建物の最も大きな特徴は、多くの計算機を有機的に結合するローカルエリアネットワーク (LAN) に積極的に対応した点である。建物内にはイーサネット用同軸ケーブル網が張り巡らされており、各々の研究室、会議室及び事務室等の壁面には電源や電話のコンセントと並んでイーサネット接続用の「情報コンセント」が1つ取り付けられている。これによってワークステーションやパーソナルコンピュータ等を簡単にLANに接続することができる。現在、本センターLANにはホスト計算機として富士通製スーパーミニコンピュータ及びUNIX系ワークステーション9台が接続されている。また約25台のパーソナルコンピュータが接続されており、ここから計算機端末、文書作成印刷、テレックス送信、電子メール等の機能を利用することができる。さらに、専用回線を用いて信楽MU観測所のLANと接続されており、相互に計算機の利用が可能である。全学ネットワークのKUINSとの接続が先日行われたが、これによって例えば本部地区の協力研究室との計算機相互利用やデータ交換等が可能になると期待される。

(超高層電波研究センター)

